

歯周病と全身疾患

以前から歯周病の原因は、歯周組織に付着する細菌とその代謝産物（プラーク）に由来することは広く知られていました。最近では歯周病が口腔領域のみならず、身体全体の防御機構と深く密接な関係にあることが明確になってきました。

歯周病は、メタボリックシンドロームといわれるインスリン抵抗性症候群、内臓脂肪症候群、肥満、喫煙、高脂血症、ストレス、アルコールなどがリスク因子となつて、糖尿病、心臓血管系疾患、呼吸器疾患、低体重児早産、骨粗鬆症などの全身疾患に影響を与えています。

現在では、歯周病を予防、治療することにより、これらの疾病を軽減することが可能となっています。

1 歯周病と全身疾患との関係

歯周病はプラーク中の細菌がセメント質に付着し、感染症を引き起こします。歯周病細菌が内毒素（LPS）を産生し、歯周組織を破壊していくと、歯肉血管の透過性は亢進され、血管を介して各臓器へ歯周病細菌が伝搬されます。

2 糖尿病との関係

歯周病はCRP（炎症性反応タンパク）を増加させ、肝臓の働きを鈍くします。その結果、ブドウ糖の代謝障害を引き起こし、糖尿病を進行させます。一方、糖尿病における高血糖も歯周組織の炎症を惹起させ、歯の周囲の骨吸収を引き起こし、歯周病に陥りやすくなります。歯周病と糖尿病を放置することは、互いに相乗効果を引き、加速度的に両者の病態を悪化させます。

3 歯周病と心臓疾患との関係

心臓血管系疾患、冠動脈性心疾患、脳卒中、末梢動脈性疾患などを惹起するアテローム血栓症で、歯周病細菌が検出されています。また、血小板の凝集を誘導したり、高血圧になりやすくなります。

4 呼吸器疾患との関係

呼吸器疾患は細菌性肺炎、気管支炎、咽頭炎などに分類されます。口腔細菌が肺炎、肺膿瘍、肺気腫のような下部気道感染症の原因であることは周知の事実です。口腔内に貯留する細菌は、呼吸器疾患の病原体と共に吸収され、呼吸器上皮に付着します。付着上皮は、露出や破壊が進行し、炎症を増加させ、感染に対する感受性を高めます。その結果、肺皮質を破壊して肺気腫を引き起こしたり、慢性閉塞性肺疾患の原因になります。

5 低体重児早産との関係

歯周病細菌は、血行を介して子宮にも感染を波及させ、早産の原因となることが動物実験で証明されています。中等度以上の歯周炎のある母親は、歯周病のない母親より低体重児を出産するリスクが7倍以上高いことが報告されています。妊娠期間中に羊水内に口腔内細菌が感染すると子宮の収縮を刺激し、低体重児早産の引き金になるといわれています。

6 骨粗鬆症との関係

骨粗鬆症とは骨塩量の減少によって骨の微細構造が破壊をきたして骨強度が低下し、骨折に対するリスクが高い全身疾患といわれています。現在でも1000万人が罹患しており、女性が全体の7割を占め、特に閉経後の女性に多く見られています。骨粗鬆症は腰が曲がり、身長が縮むといった軽度症状から、重症になると転倒などにより簡単に骨折しやすくなるなどの症状が見られます。こうした骨折による寝たきりが原因となり、介護保険の中でもその処置が介護士たちの大きな負担となっています。口腔

領域の低骨密度は全身の低骨密度と密接に関係しており、歯周病細菌の感染により、歯槽骨の吸収は著しくなります。また骨粗鬆症になると歯周病由来の破骨細胞による骨吸収が促進され、高齢者に見られる義歯の不適合などが早期に発現します。そのほか喫煙やカルシウム摂取不足など、生活習慣とも関連が見られます。

7 歯周病の予防・治療への提言

歯周病は局所の細菌感染、生体防御としての宿主因子、生活習慣を含めた環境因子などの相互作用による複合感染であり、局所に留まらず、全身に大きな影響を与えています。

歯周病の予防・治療に対しては歯周病検査を行い病態を把握すること、モチベーション、プラークコントロール、歯石の除去などで前述の原因が除去できないときは、抗菌剤の全身または局所への投与を行い、口腔全体の歯周病細菌を減少させること、一法として、歯科医院でのPTC（プロフェッショナル・トゥース・クリーニング）、PMTTC（プロフェッショナル・メカニカル・トゥース・クリーニング）、PCTTC（プロフェッショナル・ケミカル・トゥース・クリーニング）なども積極的に利用することなどがあげられます。将来的には歯科と医科が連携して、定期的な疾病管理を行うことが必要不可欠であると考えます。

